

奈良女大生活環境 宮坂 靖子

【目的】我が国では1980年前後から、「老後問題は女性問題である」との認識が定着し、高齢者問題が女性学や女性社会学において主要なテーマとなった。特に女性には従来ケア役割が配当されてきたゆえ老親介護の問題に比重が置かれてきた。このような「老人問題」に対して、女性達が自分自身の老後に主体的に向き合うことによって生じた問題を「老後問題」とし、この老後問題がいかなるものであるのかを考察する。

【方法】奈良市にある県女性センター主催「なら女性ゼミナール」を受講し、その後も自主学習グループに参加している63～32歳の21人の女性に、1～4時間のインタビュー調査を行った。

【結果】少数のサンプルではあるが考察の結果、1925年以前生まれの第1世代、1925～50年生まれの第2世代、1950年以降生まれの第3世代に分類することができた。第1世代とは、老後問題に向き合う向老期を経ずして、老後期に老人問題に直面した世代である。それに対して、第2世代は中年期と老後期の間に向老期という1つのライフステージを有している。老親の介護問題と関わりながら、自己の老後問題、すなわち自己の「老い」に向き合っており、このことが現在の生活(「生い」)の主要な課題となっている。なおこの世代間の差異は、人口学的条件からも規定されていることも重要な要因である。またこの世代では、従来のイエ制度に基づく父系意識が双系化、さらには母系化へと変容してきている。団塊の世代以降の第3世代には、家族の枠にとらわれない「自立と共生」への模索、自己の人生対する自己責任の明確化などの特徴が看取できた。